

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は5ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立桜修館中等教育学校

次の**文章A**・**文章B**を読んで、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、文章の後に〈言葉の説明〉があります。)

文章A

本を読んだり、人の話を聞いたりしていて、分からないところがある。するといろんな問いがわいてくる――「これはどういう意味だろう?」「なぜこう言えるんだろう?」「要するに何が言いたいんだろう?」

あらゆる文章を100%理解しないといけないわけではなく、ある程度分かるだけでいい場合も多い。新聞や雑誌も、記事によっては、分からない言葉がいくつも出てくる。それでもだいたいのことが分かれば、普通は十分だろう。たとえば次のような文章である。

「**経済産業省**は『**エネルギー基本計画**』において、**温室効果ガス**の**排出量**を**実質ゼロ**にする政府目標の達成に向け、**再生可能エネルギー**の**拡大**を**最優先課題**とした。」

「**エネルギー基本計画**」や「**温室効果ガス**」や「**再生可能エネルギー**」がよく分からない、もしくはより正確に理解したいのであれば、「**エネルギー基本計画**って何だろう?」「**温室効果ガス**って何だろう?」というふうに問い、本で調べるなり**ググる**なりすればいい。

家電製品のパンフレット、**取扱説明書**も、すべてを理解することはない。とりあえず使うのに必要なことが分かればいい。分からなければ、人に聞くなり、ネットで調べればいい。

何であれ、物事を理解するという観点からすれば、分かることが増えれば、分からないことが減る。そのつどこれくらいで十分という程度があつて、そこに至れば、さしあたり問題ない。

けれども、より深く理解するというのは、いつでも可能だ。

経済産業省の文章では、「**エネルギー基本計画**」とは何か、いつからあるのか、これまでどのような計画が立てられ、具体的にどのような活動に結びつき、どの程度達成されてきたのか、再生可能エネルギーをどれくらい導入すれば、温室効果ガスを「**実質ゼロ**」にできるのか、そのために他にどのような方法があるのか、等々いろいろ問うことができる。

こうした問いかけによって、物事の理解はいくらでも深めることができる。同様のことは、人についても言える。

誰かと知り合う。名前から始まって、仕事や出身、住んでいるところ、趣味、食べ物の好き嫌いなど、お互いの話や問いかけのなかで分かってくる。そうやってお互いのことを知る。そういうたんなる「**知り合い**」にとどまる関係は、知っていることの多い少ないの**違い**はあるが、**比較的表面的な付き合い**であろう。

だが、たんなる知り合いであることを超えて、より深く理解しよ

うと思えば、いろんなことについて話し問いかけ、お互いの考えや気持ちを理解しないといけない。

そのために「○○についてどう思う?」「何でそう思うの?」「一緒に○○しない?」「何かアイデアない?」などと問いかける。そうやって相手をより深く理解し、より親密な関係を築いていくのである。

そのように理解したいと思う気持ちから出てくる疑問は大切にしたいほうがいい。それによって私たちは始めて、たんに知っているという表面的な次元の向こうへ深く入っていくことができるからである。

(梶谷 真司^{かじたに しんじ}「問うとはどういうことか 人間的に生きるための

思考のレッスン」(一部改変)による)

〈言葉の説明〉

ググる——インターネット上で情報を検索^{けんさく}するためのシステムを用いて、言葉や画像を調べたり探し出したりする。

文章B

* ミヒヤエル・エンデの傑作『モモ』の主人公は「ぼんやりしている時間」を大切にしている少女だった。

② ぼんやりとしている時間はそれこそ、むだそのものだ。効率至上主義者はそういうだろう。むだな時間をいくら重ねてもなんの稼ぎにもならない、なんの稼ぎにもならないことに時間を費やすのは愚の骨頂ではないか。そういうに違いない。

でも、一見むだに見える時間のなかに、実は大切な役割をはたしているものがたくさんある。街をぶらつく。夕焼けをながめる。虫の声を聞く。雲を見る。星を仰ぐ。雑談をする。そういうむだに見える時間を重ねるところに、生活の厚みとか深みとか、そういうものが育ってくるのではないか。たくさんのおだな時間の集積こそが、実は、暮らしをゆたかにする潜在的な力をもっているのではないか。

エンデの作品は、時間泥棒の「灰色の紳士たち」が、人びとから「時間」を奪ってゆく物語だ。むだだと思われる時間を奪われた人びとの暮らしはどうなるか。それが『モモ』の主題だ。

モモは、どこからかふらりとその地にやってきた少女だった。土地の人たちの好意で、古い円形劇場跡の一角に住まわせてもらうようになる。少女は、夜空をながめ、夜空の発する「荘厳なしずけさ」をひたすら聴くのが好きだった。

エンデはこう書いている。

「友だちがみんなうちに帰ってしまった晩、モモはよくひとりで長あいだ、古い劇場の大きな石のすりばちの中にすわっていることがあります。頭の上は星をちりばめた空の丸天井です。こうしてモモは、荘厳なしずけさにひたすら聞き入るのです。

こうしてすわっていると、まるで星の世界の声を聞こうとしている大きな大きな耳たぶの底にいます。そして、ひそやかな、けれどもとても壮大な、えもいわれず心にしみいる音楽が聞こえてくるように思えるのです」

モモは「ひそやかな、けれどもとても壮大な音楽」を聴き、ぼんやりとした時間を過ごす。モモにとって、このぼんやりの時間は決してむだな時間ではない。宇宙の静寂のなかで時を過ごすというのは、モモがモモらしく生きるための、大切な時間だった。夜空をながめる時間をもつことで、モモは「荘厳なしずけさ」を感じることができたし、なによりもそういう時間をもつことで、曇らない目をもつことができ、灰色の紳士たちのインチキを見破ることができた。

かなしいことに、私たち現代人は、夜空をしみじみと仰ぐ習性からしだいに遠ざかっている。利潤とか、効率とか、管理とか、豪華さとか、スピードとか、そういうものを生活の拠り所とする人びとが増え、夜空をながめるなんてむだなことだ、と思う人が増えてきた。しかし、そのむだは本当にむだなことなのか。そういうむだがあるからこそ、生活はむしろ、ゆたかなものになっているのではないか。

(辰濃和男「ぼんやりの時間」による)

〈言葉の説明〉

ミヒヤエル・エンデ——ドイツの児童文学作家。

効率至上主義者——効率のよさを求めることが最もよい
という考え方をもっている人。

愚の骨頂——たいへんおろかであること。

潜在的——外にあらわれ出てはいないが、内側に
かくれて存在している様子。

円形劇場——中央を舞台とし、その周りに観客席を
もうけた劇場。

荘厳——おもおもしろくてりっぱな様子。

丸天井——半球の形の天井。ドーム。

壮大な——大きくて、りっぱな。

えもいわれず——言葉ではうまく言えない。

静寂——静かで、ひっそりとしていること。

利潤——仕事や商売でのもうけ。利益。

〔問題1〕

文章A

①に、それによって私^{わたし}たちははじめて、たんに

知っているという表面的な次元の向こうへ深く入っていくことができる ありますが、これはどういうことなのか、五十文字以上六十文字以内で説明しましょう。

〔問題2〕

文章B

②に、 ぼやーっとしている時間はそれこそ、

むだそのものだ とありますが、そのように考えている人の生活について、筆者の考えをふまえて、六十文字以上七十文字以内で説明しましょう。

〔問題3〕

文章A

・ 文章B

を読み、あなたにとって、一見むだ

に見えるけれども本当は大切だと思うことについて、あなたの体験をふまえながら四百文字以上五百文字以内で自分の考えをまとめましょう。第一段落^{だんらく}には、一見むだに見えるけれども本当は大切だと思うことは何かを書きましょう。第二段落よりあとには、そのことについてのあなたの体験と考えを書きましょう。ただし、次の（書き方のきまり）にしたがいましょう。

（書き方のきまり）

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落^{だんらく}の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話などを入れる場合は、行をかえてはいけません。
- 、や 。 や 」などはそれぞれ一ますに書きます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）
- 。 と 「 が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、 「 で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。
- 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直します。